

## 保育者効力感、社会的スキル及び職務満足感が保育士の 精神的健康に与える影響

前田 直樹\* 金丸 靖代\*\* 畑田惣一郎\*\*\*

Influence of Preschool-Teacher-Efficacy, Social Skills and Work Satisfaction  
on Mental Health

Naoki Maeda, Yasuyo Kanemaru, Soichiro Hatada

### Abstract

The purpose of the present study was to investigate preschool teacher's mental health and to examine the influence of preschool-teacher-efficacy, social skills and work satisfaction on their mental health. One hundred preschool teachers (8 males, 92 females) were administered a questionnaire including preschool teacher-efficacy scale, Kiss-18, work satisfaction scale and BDI-II. With regard to the situation of mental health, preschool teachers scored slightly lower than the general level. Pass analysis indicated that 1) preschool-teacher-efficacy and social skills had a significant effect on work satisfaction, and 2) social skills and work satisfaction affected mental health significantly. Social skills influenced mental health of preschool teachers directly while preschool-teacher-efficacy had an effect on it indirectly. These results suggested that social skills training for preschool teachers would be effective in order to maintain their mental health.

Key words: Preschool-teacher-efficacy, social skills, work satisfaction, mental health

キーワード：保育者効力感 社会的スキル 職務満足感 精神的健康

2008.11.26 受理

### はじめに

1997年の児童福祉法改正により、保育士とは「保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう」（児童福祉法第18条の4）と変更された。また2000年の保育所保育指針改訂により、保育所保育指針の総則に「子どもを取り巻く環境の変化に対応して、保育所には地域における子育て支援の

ために、乳幼児などの保育に関する相談に応じ、助言するなどの社会的役割も必要となってきた」と新たに付け加えられた。

このように、保育士には通常の保育所での保育業務に加え、保護者に対する相談、助言を行なうこと、さらに地域の子育て支援を行なうことという役割が与えられ、保育士というケアワーカーとしてだけではなく、ソーシャルワーカーとしての役割も法的に明確に示された。そのような業務を行なうためには、保育に関する知識・技

\*九州保健福祉大学社会福祉学部 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

\*\*医療法人真愛会 高宮病院 〒880-0841 宮崎県宮崎市吉村町大町甲1931

\*\*\*志学館大学大学院心理臨床学研究科 〒899-5194 鹿児島県霧島市隼人町内1904-1

Department of Clinical Welfare Service, Kyushu University of Health and Welfare 1714-1 Yoshino, Nobeoka, Miyazaki, 882-8508  
Takamiya Hospital 1931 Omachikou, Yoshimura, Miyazaki, Miyazaki, 880-0841

Department of Clinical Psychology, Graduate School Psychology, Shigakukan University 1904-1 Hayatochouchi, Kirishima, Kagoshima, 899-5194

術はもちろんのこと、一定のソーシャルワークやカウンセリングに関する知識・技術そして専門職としての倫理を修得する必要がある。事実、児童福祉法第48条の2第2項でも「保育に関する相談・助言を行うための知識および技能の修得、維持および向上に努める義務」と記載されている。

一方、実際に保育士が働いている保育所では、保護者の養育状況に合わせて一時保育や延長保育、休日保育、病後児保育、障害児保育など、様々な特別保育が実施され、それに応じて保育士の勤務などの業務体制も変化してきている。また園内の行事として、スポーツ教室や英語教室のような外部から講師を招いて行なわれる習い事や、季節ごとに決められた恒例行事など年間を通して多くの行事が行なわれている。子どもを取り巻く社会環境の変化に伴い、現在、保育園や保育士に対する期待は大きく、保育ニーズはさらに多様化し、保育士の職務内容は大きく変化している(山城・上地・嘉数, 2006)。

保育所保育指針によると「保育所は、乳幼児が、生涯にわたる人間形成の基礎を培う極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごすところである。保育所における保育の基本は、家庭や地域社会と連携を図り、保護者の協力の下に家庭養育の補完を行い、子どもが健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境を用意し、自己を十分に発揮しながら活動できるようにすることにより、健全な心身の発達を図るところにある」と示されている。増加の一途をたどっている保育業務に加え、多様化する人間関係の中で保育士は子どもたちに対して健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境を提供できているのであろうか。

保護者に代わって子どもを養育する役割上、保育士は心身ともに健康な状態であること、そして保育士としての資質を備えていることが望ましい。しかし、このような多忙な業務と複雑な人間関係の中で保育士の心身の健康は維持できているのだろうか。多様化された保育業務の中で、保育士が自信と意欲を持って業務を遂行することは従来よりも困難であり、それが保育士の心身の健康に大きく影響を及ぼしていることが推測される。また、心身の健康状態を維持することが困難になれば、日常の業務に支障をきたし、保育士の業務に対する自信や意欲喪失に影響を及ぼしていくという悪循環に陥る可能性がある。

近年、職場のメンタルヘルス、特に教育現場で働く人々の精神的健康が重要視され、各地で講演や研修会などが行われている。また保育の現場では多様な子どもや保護者の対応に迫られ、保育士のストレスや精神的健康

の問題が指摘されている(坂田, 2000; 重田, 2007)。変化の著しい教育現場において、そこで働く人々の精神的健康の問題を考慮し、またそれに影響を及ぼす要因を詳細に検討していくことは重要なことである。

保育士の精神的健康とストレスの要因に関しては、これまでいくつかの研究で扱われてきた。秦野・青木(2006)は、保育士の精神的健康に影響を与えている要因として、「園内の人間関係の複雑さ」「保育士としての技量」「クラス運営の難しさ」の3つのストレス因子を挙げている。また、村田(2006)は調査対象となった保育士の46%以上がストレス状態にあり、「仕事への士気」「積極的対処行動」はストレスを弱め、「不快な人間関係」「無力体験」はストレスを強めると指摘している。嶋崎(1995)は保育者の精神的健康を阻害する心理社会的要因を検討し、精神的健康に最も影響力のある背景要因は「士気の低下」であったことを明らかにした。さらに、精神的健康を保つためには保育スキルに関して自信を持つこと、また円滑な対人関係能力を持つことが重要であるとしている。

このように、保育士の精神的健康について検討する場合、それに影響を及ぼすストレス、また個人のストレスに影響を及ぼす個人特性の影響を検討する必要がある。保育士の個人特性に関しては、近年、保育者の保育能力に関連する保育者効力感の概念が研究に取り入れられてきている(三木・桜井, 1998; 三宅, 2005)。保育者効力感とは、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」(三木・桜井, 1998)のことである。これまで保育者効力感と精神的健康との関連を検討した研究は少なく、この領域の研究では、西坂(2002)が、保育者のストレス評価に影響を及ぼす個人特性として保育者効力感、ハーディネスを仮定し、ストレスの要因と個人特性が精神的健康に与える影響について検討している。この研究では、「園内の人間関係」、「仕事の多さと時間の欠如」、そして「ハーディネス」が精神的健康に直接影響を及ぼしていることが明らかにされたが、同時に保育者効力感の精神的健康への直接的・間接的な影響が見られなかったことも示唆された。これに対して、三宅(2005)は保育者効力感が心身のストレスに関するいくつかの側面に影響を及ぼすことを指摘し、この分野におけるより詳細な研究が必要であると指摘している。現在のところ、保育者効力感と精神的健康の直接的な関連性は明らかにされていないが、保育士としての指導技術や業務に対する自信が、精神的健康に何らかの影響を与える可能性は否定できない。

保育者効力感に限らず、保育士の個人特性と精神的健康との関連性については、現在のところ研究は発展途上にある。したがって、様々な個人特性を仮定し、それらが精神的健康に与える影響を検討していくことは有意義であると考えられる。他の教育現場と違って、保育者が働く環境はインフォーマルな教育の場であって、フォーマルな教育現場以上に対人関係や相互理解が重要であり(西坂, 2002)、その場に健康的に適応していくための個人特性の影響は他の教育機関よりも大きいと推測される。嶋崎(1995)が指摘しているように、その中でも特に対人関係能力、つまり社会的スキルは保育者効力感同様に保育士にとって重要な個人特性であると考えられる。

社会的スキルとは対人関係を円滑にする能力であり、トレーニングによって獲得が可能な技能である(大坊, 2003)。この社会的スキルと精神的健康との関連性は従来から指摘されている(Argyle, 1994; 相川, 2005)。したがって、保育士のストレスを検討していく上で、社会的スキルは重要な個人特性の1つであると考えられ、また様々なストレスに影響を及ぼしている事が予測される。他の教育機関と異なり、保育施設に勤務している保育士は、多様な子どもたちだけでなく、多様な保護者との交流も日常的に行わなければならない。したがって、保育者効力感同様、対人関係の能力である社会的スキルが、日常の業務に密接に関わってくる可能性は高いと考えられる。また社会的スキルは職場でのストレスや精神的健康にも影響を及ぼしていることが指摘されている(田中, 2007)。日常生活での対人関係に大きく影響を及ぼす社会的スキルは、保育者効力感とともに保育業務を円滑に行う上で重要な特性であり、これが高い人は職場においてストレスにうまく対処しながら、仕事に対する満足感を得られ、精神的健康度を維持できるのではないかと考えられる。

そこで本研究では、保育士の精神的健康の実態を把握し、また西坂(2002)の想定した因果モデル「個人特性→ストレス評価→精神的健康」を参考に、個人特性としての保育者効力感、社会的スキルが保育者の職場満足感及び精神的健康に影響を及ぼす過程を分析・検討することを目的とする。

## 研究方法

### 1. 調査対象

調査は2008年7月上旬から7月下旬にかけて実施した。調査対象はM市内のおよびH市内の11の保育施設の

保育士188名であり、「保育士の精神的健康に関する調査」という名目で、人数分の質問紙を保育施設において直接配布した。配布した質問紙に無記名で回答してもらい、回答後、各個人に直接郵送してもらうように依頼を行った。113名からの回答が得られ、そのうちデータに不備があるものを除外し、最終的に100名(男性8名、女性92名)のデータを本研究の対象とした。対象者の平均年齢は37.02歳(SD=11.2)であり、婚姻状況については既婚56名(56%)、未婚42名(42%)、その他2名(2%)であった。雇用形態に関しては、正規雇用41名(41%)、臨時職員59名(59%)であり、保育歴の平均は12.01年(SD=8.9)であった。

### 2. 調査内容

対象者に対し、基本属性(性別、年齢、雇用形態、保育士歴、婚姻の有無)に関する質問及び以下の4種類の尺度から構成される質問紙調査を実施した。

#### 1) 保育者効力感尺度

教師効力感尺度をもとに、三木・桜井(1998)によって開発された尺度である。10項目からなり、回答は「非常にそう思う」「ややそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそうは思わない」「ほとんどそうは思わない」の5件法で求められた。最低10点、最高50点であり、得点が高いほど保育者効力感が高いとみなされる。

#### 2) Kiss-18

菊池(1998)によって開発された社会的スキル尺度であり、初歩的なスキル、高度のスキル、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、ストレスを処理するスキル、計画のスキルの6種類のスキルを含んでいる。18項目からなり、「いつもそうだ」「たいていそうだ」「どちらともいえない」「たいていそうでない」「いつもそうでない」の5件法で回答させた。得点は18点~90点に分布し、得点が高いほど社会的スキルが高いと判断される。

#### 3) 職場環境、職務内容、給与に関する満足感測定尺度

本尺度は、職務満足感を「職務内容」「職場環境」「給与」「人間関係」の3つの要因に対する満足感を測定する尺度であり、安達(1998)によって開発された。本研究ではこのうち「職務内容」を保育士業務に合わせて一部修正し使用した。質問項目は8項目で、それぞれの質問に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4件法で回答させた。得点は8点~32点に分布し、高得点であるほど職務内容の満足感が高いと判断される。

#### 4) 日本版ベック抑うつ尺度(BDI-II)

本研究では、精神的健康の指標として日本版ベック抑うつ尺度(BDI-II)を使用した。この質問紙は21項目から

なり、1問につき4つの選択肢があり、気持ちに最も近い文章を回答者に1つ選んで回答してもらおう。総合得点が0~63点の範囲で分布し、高得点ほど抑うつ重症度が高いことを示す。

## 結果

はじめに、保育士効力感尺度、Kiss-18、職務内容満足感尺度、BDI-IIの信頼性を検証するため、Cronbackの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、「保育士効力感尺度」 $\alpha=.89$ 、「Kiss-18」 $\alpha=.90$ 、「職務内容満足感尺度」 $\alpha=.79$ 、「BDI-II」 $\alpha=.90$ であり、各尺度高い水準の内的整合性が認められ、分析を行うのに十分な信頼性があると判断した。また、本調査の対象者は女性が92%であるので、性別は分析の対象とせず、男女を統一したデータで分析を行った。

### 1. BDI-IIにおける保育士の精神的健康の実態

本調査におけるBDI-IIの平均得点は10.06(SD=7.60)であった。また、保育士の精神的健康度の分布を把握するため、ベック(2003)のカットオフポイントに従い、抑うつの重症度を0-13「極軽症」、14-19「軽症」、20-28「中等」、29-63「重症」の4つのカテゴリーに分類した。抑うつの重症度評価別の人数及び割合をTable 1に示す。それぞれの人数の割合は「極軽症」72%、「軽症」17%、「中等」8%、「重症」3%であった。また、年齢別(20代、30代、40代、50代以上)に抑うつ得点を分類した各得点をTable2に示す。さらに、年齢別の4つカテゴリーを独立変数、BDI-II得点を従属変数として、1要因の分散分析を行った。その結果各グループ間の得点に有意差は見られなかった( $F(3, 96)=10, n.s.$ )。また、婚姻の有無(未婚、既婚)及び雇用形態(正規職員、臨時職員)においてBDI-IIの得点を比較した(Table 3)。その結果、婚姻、雇用形態ともに有意な差は見られなかった( $t(96)=.05, n.s.$ ;  $t(92)=-.84, n.s.$ )。

Table 1 BDI-IIの段階別の比較

	BDI-II 得点	n	%
極軽症	0-13	72	72.0
軽症	14-19	17	17.0
中等	20-28	8	8.0
重症	29-63	3	3.0

Table 2 BDI-II得点の年齢別の比較

年代	n	BDI-II 得点	SD	F値
20-29	33	9.57	8.28	0.10
30-39	25	10.64	8.00	
40-49	26	9.92	5.49	
50以上	16	10.37	8.99	

### 2. 保育士歴、保育士効力感尺度、Kiss-18の相関関係

保育士歴と個人特性との関連を検討するために、各尺度間の相関係数を算出した。その結果、「保育士歴」と「保育士効力感尺度」との間には有意な正の相関が認められた( $r=.45, p<.01$ )。しかし、「Kiss-18」と保育士歴との間には有意な相関は見られなかった( $r=-.08, n.s.$ )。

### 3. 保育士効力感尺度、Kiss-18、職務内容満足感尺度、BDI-IIの相関関係

保育士効力感、社会的スキル、職務内容満足感と精神的健康との関連を検討するために、各尺度間の相関係数を算出した。各尺度間の相関係数をTable3に示す。まず、保育士効力感と各尺度との相関を見ると、「Kiss-18」「職務内容満足感尺度」との間には有意な正の相関が見られ、「BDI-II」との間には有意な相関は見られなかった( $r=.33, p<.01$ ;  $r=.35, p<.05$ ;  $r=-.18$ )。次にKiss-18と各尺度との関連性を見ると、「職務内容満足感尺度」との間には有意な正の相関、また「BDI-II」との間には有意な負の相関が認められた( $r=.34, p<.01$ ;  $r=-.36, p<.01$ )。さらに、「職務内容満足感尺度」と「BDI-II」との間には強い負の相関が認められた( $r=-.55, p<.01$ )。

Table 3 保育士効力感、Kiss-18、職務内容満足感尺度の相関

	保育士効力感	Kiss-18	職務内容満足	BDI-II
保育士効力感	-	.33**	.35**	-.18
Kiss-18		-	.34**	-.36**
職務内容満足			-	-.55**
BDI-II				-

\*\* $p<.01$

### 4. 保育士効力感、Kiss-18、職務内容満足感尺度、BDI-IIのパス解析

保育士効力感、社会的スキルから精神的健康に至るまでの過程を検討するために、重回帰分析を利用したパス解析を行った。結果をFigure1に示す。パス解析の結果、保育士効力感及び社会的スキルは職務内容満足感に有意な影響を及ぼし( $\beta=.29, p<.01$ ;  $\beta=.28, p<.01$ )、社会的スキルと職務内容満足感は精神的健康に有意な影響及ぼしていることが明らかにされた( $\beta=-.21, p<.01$ ;  $\beta=-.48, p<.01$ )。

## 考察

### 1. 保育士の精神的健康の実態

本研究の1つ目の目的は調査した保育士の精神的健康の実態を把握することである。本研究では精神的健康度の指標として抑うつ尺度(BDI-II)を使用した。ベック(2003)のカットオフポイントに従った得点の分布は

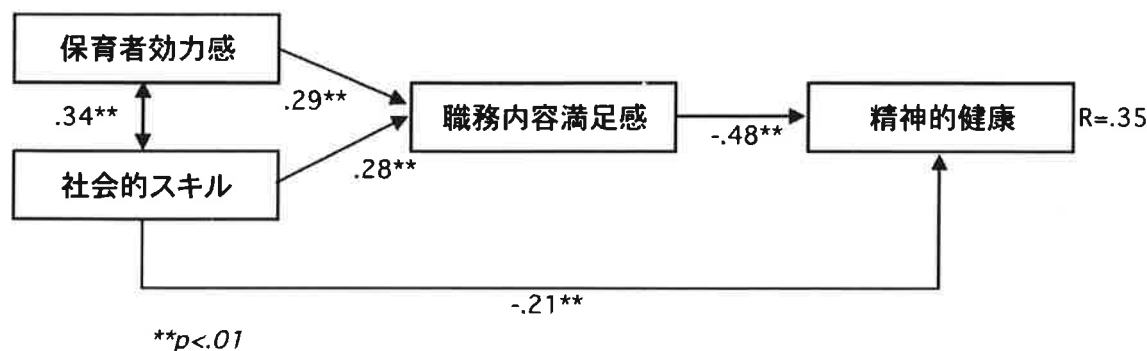


Figure 1 保育者効力感、社会的スキル、職務内容満足感、精神的健康のパス図

「極軽症」72%、「軽症」17%、「中等」8%、「重症」3%であった。これは日本人一般集団の平均(「極軽症」81.7%、「軽症」12%、「中等」5%、「重症」1.4%) (小嶋・古川, 2003) と比べるとやや高い値を示していた。近年、保育業務の急激な多様化により、保育士の精神的健康が懸念されるが、この結果はそのような保育士の現状を反映したものであるといえよう。また、年齢別、雇用形態別、婚姻の有無において平均得点には有意な差は見られなかった。この結果から、保育士の精神的健康には職場環境以外の要素よりも、職場内におけるストレス要因が影響していると考えられる。

## 2. 保育士歴と保育者効力感、社会的スキル、職務内容の満足感との関係

保育士歴と保育者効力感、社会的スキル、職務内容の満足感の相関を分析した結果、保育者効力感と保育士歴との間に相関は認められたが、社会的スキル、職務内容の満足感には有意な相関は見られなかった。保育者効力感と保育士歴に相関が認められたことは、保育士業務に対する自信とスキルが経験によって身につくということを示唆していると言えるだろう。それに対して、社会的スキルと保育士歴との間には相関関係は見られなかった。社会的スキルは対人コミュニケーションの技能であり、保育士の業務以外でも必要とされるものである。したがって、保育士歴が長くなれば自然に身につくというものではない。保育士歴が長くなっても、社会的スキルが欠如している保育士は、業務を行う上で様々な対人関係の問題に直面する可能性があり、社会的スキル教育などにより、欠けているスキルを身につけていく必要があると考えられる。

## 3. 保育者効力感、社会的スキル、職務内容の満足感が精神的健康に及ぼす影響の検討

保育者効力感と社会的スキルとの間には有意な正の相

関が見られたことから、社会的スキルと保育士の業務に対する自信やスキルとの間に相互作用が認められた。社会的スキルと自己効力感の関連性はこれまでの研究で明らかにされているが(坂野・前田, 2003)、特定の効力感である保育者効力感もまた、自己効力感同様、社会的スキルと関連性があることが示唆された。社会的スキルと保育者効力感とは双方ともに保育士個人の特性であり、対人関係に直接関わる社会的スキルは、保育士にとってより広範囲に影響を及ぼすことが考えられる。つまり、高い社会的スキルを持っている人は保育士業務におけるスキルや自信も高く、この対人関係のスキルを用いて日常の保育業務に取り組み、結果的にそれが保育者効力感を高めていると考えるのが妥当であろう。

次に保育者効力感と社会的スキルが職務内容の満足感に有意な影響を及ぼしていることが示唆された。保育者効力感とは保育業務に関する自信とスキルであり、これが高い人は、日常の業務を円滑に行うことができ、その結果、職務内容に関する満足感が高くなるのではないかと考えられる。また社会的スキルが職務内容の満足感に与える影響については、社会的スキルが高い人は、職場での対人関係の問題にうまく対処しながら様々な環境に適応でき、結果的に職務の満足感を得られる状態に自ら導くことができるのではないかと考えられる。一般的に社会的スキルは対人関係やストレスと密接に関わっていることが指摘されているが(相川・津村, 2002)、社会的スキルと職務内容の満足感との関連を検討した研究はこれまであまり見られなかった。これは社会的スキルが保育者効力感に比べて、職務内容に直接関連する対象として捉えられていなかったからであると考えられる。したがって、今回、社会的スキルが保育士の職務内容の満足感に直接的な影響を及ぼしていたことは、対人関係の能力である社会的スキルが、職場の対人関係のみならず、保育業務や職務内容の満足感に直接影響を及ぼす重要な要因であることを表していると言えるだろう。

さらに精神的健康と社会的スキル、職務内容の満足感について見てみると、双方ともに精神的健康に直接影響を及ぼしていることが明らかにされた。特に職務内容の満足感が精神的健康に与える影響は大きかった。近年の様々な業務負担により、保育士自身が職務内容に満足感を得られない場合、それがストレスとなり精神的健康に直接影響を及ぼすことは十分に考えられる。同様に社会的スキルも精神的健康に直接影響を及ぼしていた。田中(2007)は職場における社会的スキルとストレス反応を分析し、社会的スキルの欠如が、抑うつ、対人場面での緊張感などの心理ストレス反応と関連し、社会的スキルが労働者の精神的健康に直接関連していることを指摘している。今回の結果は田中(2007)の指摘を踏襲したものであったと言えるだろう。保育士という職業は他の職業以上に様々な人とコミュニケーションを取ることが求められる。したがって、個人の社会的スキルが職場で及ぼす影響は大きく、社会的スキルの欠如は直接的・間接的に精神的健康に悪影響を及ぼすと考えられる。

パス解析の結果をまとめると、保育士の個人特性である保育者効力感、社会的スキルは職務内容の満足感に影響を及ぼし、社会的スキルと職務内容の満足感は精神的健康の直接的な要因となっていた。保育者効力感も職務内容の満足感を媒介して間接的に精神的健康に影響を及ぼしていた。この結果は秦野・青木(2006)の保育者効力感と精神的健康との関連性を部分的に支持する結果となった。すなわち、保育者効力感を持っている人ほど職務内容に対する満足感を得ることができ、それが結果的にストレスを抑制しているということである。したがって、保育士の専門性を身につけることは、保育業務遂行に役立つだけでなく、職務への満足感を高め、精神的健康を促進する作用もあるということである。

社会的スキルに関しては、保育士の精神的健康の直接的・間接的な要因になっていた。同じ個人特性であっても保育者効力感と異なり、社会的スキルは日常生活の対人関係に関する技能である。この社会的スキルが保育士の精神的健康に直接影響を及ぼしていたという結果は、対人相互作用の機能が、いかに職場の健康面に影響を及ぼしているかを明らかにしたといえるだろう。また職務内容の満足感に与える影響も大きく、社会的スキルが保育士の業務に重要な役割をはたしていることが示された。これまで、保育士の社会的スキルが精神的健康に影響を及ぼすことを検討した研究はほとんど見られず、今回の結果は、今後の保育士の精神的健康を考えていく上で、1つの資料となるのではないだろうか。実際、保育士業務に関する自信とスキルを高めていくことは容易なこと

ではない。なぜなら、教育現場においては様々な経験を積むことにより、業務に対する能力や自信が向上していくからである。したがって、特定の保育者効力感のみに焦点を当てて、その促進を図ろうとする場合、ある程度の経験年数がどうしても必要になるという結論に至る。

それに対して社会的スキルはどうだろうか。近年、様々な領域において社会的スキルトレーニング(SST)が導入され大きな成果を挙げている(マトソン・オレンディック, 1993)。社会的スキルトレーニングは対人関係の技能を身につける訓練であるので、保育士の年齢や勤務年数は基本的に関係ない。本研究においても、年齢と社会的スキルの間には有意な相関は見られていない。つまり、社会的スキルは年齢や経験年数を問わず、基本的な対人コミュニケーションの能力として誰でも訓練すれば身につくものである。保育士の精神的健康の維持・増進を検討することが現場の課題であるならば、保育者効力感を高め、業務に対するストレスを抑制し、間接的に精神的健康に働きかけるアプローチをするよりも、保育士に対するSSTを積極的に働きかけることによって、精神的健康の維持・増進を図る方が効果的ではないかと考えられる。もちろん保育士として業務にあたる以上、保育者効力感を高めることが重要であることは言うまでもない。しかし、社会的スキルが保育者効力感以上に精神的健康に関わる個人特性であるならば、保育業務の技術向上と同時に、対人関係の能力である社会的スキルも高めていくことが望ましいのではないだろうか。

## まとめ

本研究は保育士の精神的健康の実態把握と個人特性としての保育者効力感、社会的スキルが保育者の職務内容の満足感及び精神的健康に影響を及ぼす過程を分析・検討した。その結果、次のような結論を得た。まず、本研究の対象となった保育士の精神的健康は、一般的な平均よりもやや低い傾向が見られた。次に保育士の精神的健康は勤務形態および婚姻の有無によって差は見られなかった。さらに保育者効力感、社会的スキル、職務内容の満足感、精神的健康の因果モデルに関して、保育者効力感も職務内容の満足感を媒介して精神的健康に間接的に影響を及ぼし、また社会的スキルおよび職務内容の満足感も精神的健康に直接影響を及ぼす要因となっていた。個人特性に関しては、社会的スキルが直接的に精神的健康に影響を及ぼしていることが確認された。今後、保育士に対する社会的スキルトレーニングなどを導入し、保育士の健康の維持増進を図る必要があるだろう。

## 引用文献

- 安達智子 1998 セールス職者の職務満足感-共分散構造分析を用いた因果モデルの検討, 心理学研究, 69, 223-228.
- 相川充 2005 人づきあいの技術 社会的スキルの心理学, サイエンス社
- 相川充・津村俊充 2002 社会的スキルと対人関係 自己表現を援助する 誠信書房
- Beck, A.T., Steer, R.A., Brown, G.K. 小嶋雅代・古川壽亮(訳) 2003 日本版BDI-II手引き 日本文化科学社
- 大坊郁夫 2003 社会的スキルトレーニングの方法序説-適応的な対人関係の構築- 対人社会心理学研究, 3, 1-8.
- 秦野悦子・青木淳美 2006 保育士の精神的健康におけるストレス要因と効力感 保育と保健, 12, 43-47.
- 菊池章夫 1998 思いやりを科学する 川島書店
- Matson, J.L., Ollendick, T.H. 佐藤容子・佐藤正二・高山巖(訳) 1988 子どもの社会的スキル訓練 金剛出版
- Michael Argyle 1994 The Psychology of Interpersonal Behaviour, Penguin
- 三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, 46, 203-211.
- 三宅幹子 2005 保育者効力感研究の概観 福山大学人間文化学部紀要, 5, 31-38.
- 村田務 1996 保育士のストレス状況とその要因 白梅学園大学研究紀要, 32, 135-147.
- 西坂小百合 2002 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響 教育心理学研究, 50, 283-290.
- 坂野雄二・前田基成 2003 セルフエフィカシーの臨床心理学 北大路書房
- 坂田和子 2000 保育者の精神的健康に関する研究について-保育所職員の日常的ストレスについて- 聖心ウルスラ学園短期大学紀要, 30, 65-71.
- 重田博正 2007 保育者のメンタルヘルスと職場作り 季刊保育問題研究, 226, 40-49.
- 嶋崎博嗣 1995 保育者の精神的健康に影響を及ぼす心理社会的要因に関する研究 日本保育学会大会研究論文集, 628-629.
- 社会福祉法人 大阪ボランティア協会 2006 福祉小六法2007, 中央法規出版
- 社会福祉法人 全国社会福祉協議会・全国保育士会 2004 ハンディ保育所保育指針
- 田中健吾 2007 ソーシャルスキルと職場ストレスサー・心理的ストレス反応との関連 大阪経大論集, 58, 1, 253-261.
- 山城真紀子・上地亜矢子・嘉数朝 2006 沖縄県の保育者の職業ストレスと健康についての研究II 公立保育所と認可保育園を対象に- 琉球大学教育学部紀要, 69, 207-215.